

安心して自分を表現できる雰囲気はいかにしてつくられるか：3年進級時に見られた変化の分析を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大石, 佳治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007237

安心して自分を表現できる雰囲気はいかにしてつくられるか

～3年進級時に見られた変化の分析を中心に～

大石佳治

1. 問題の所在と目的

これまでの教職経験を振り返ると、自然と溢れ出る笑顔に満ちた学級と、どこか殺伐として非協力的な雰囲気で覆われた学級が存在していた。筆者が中学生だった時にどちらの雰囲気も味わい、教師となり担任したクラスでもうまく経営できない学級があったことも事実である。

生徒としては、もちろん「安心して自分を表現できる雰囲気」の学級で生活したいという思いがあるだろう。安全で、安心できる環境が保障されて初めて「自分」を発揮できるであろうし、「自分」を発揮することの積み重ねが互いの能力を高めることに繋がっていくと考える。では、生徒が安心できる環境はどのようにしてつくられるのだろうか。

筆者が実習を行った学校は、静岡市立A中学校である。平成21年度の後期より、2年生を観察し、平成22年度も3年生となった同学年の生徒を継続して観察した。彼らが2年生の時には、クラスにより差はあったが、中学2年生といういわゆる「中だるみ」も影響していたのか、明らかに落ち着いて授業に取り組んでいるとは言えない状況であった。しかし、3年生への進級と同時に彼らの行動や表れには大きな変化が見られた。

今回、筆者は第三者として学校現場に入らせていただける立場を使い、実際に目の前で展開された「生徒の表れの変化」について、「安心感の獲得」や「子どもが安心して自分を表現できる学級づくり」という視点から、特に教師の関わりに注目して検証することが目的である。

2. アクションリサーチの方法

(1) リサーチのステージ

筆者が実習を行った学校は、静岡市立A中学校である。平成22年度は各学年4学級で全校生徒数は約330名である。観察の対象は、平成21年度に2年生であった学年であり、平成22年度も3年生に進級した同学年を継続観察した。期間は、平成21年10月～平成23年1月で、金曜日を中心に64日間である。

(2) リサーチの方法

3年進級時に見られた「表れの変化」が、なぜ起こったのかを検証するために、①抽出生徒に対する面接調査、②生徒による座談会、③学年付教師に対する面接調査、④ターゲットとした教師の行動観察、の4つの方法を用いた。

3. リサーチの内容

(1) 変化について

2年次後半から生徒の行動観察を行ってきたが、3年進級時に表れが大きく変化したと強く感じられた。その点について実習記録や先生方へのインタビューを基にまとめたものが、次の

表1である。

表1 2年次と3年次の表れの比較

2年次の表れ
① ごく一部の生徒の行動が、クラス全体にマイナスの影響を与えている。
② ふざけた明るさが支配している。
③ 挙手発表は男子に指名発表は女子に多く、授業に臨む姿勢に男女差がある。
④ がんばっている生徒とそうでない生徒との二極分化が見られる。
⑤ 学級としてまとまりづらい状況にある。
⑥ 一部の教科では、全体が落ち着いて授業に臨んでいる。

3年次の表れ
① クラスにマイナスの影響を与える生徒が見られない。
② 互いに受け容れあう自然な、温かな明るさがある。
③ 女子が積極的に発言するようになり、授業に臨む姿勢に男女差は見られない。
④ ほとんどの生徒が集中して授業に取り組んでいる。
⑤ 男女が協力できるようになり、学級としてのまとまりがある。
⑥ 教科に関係なく前向きに取り組んでいる。

表1のような変化に繋がった要因を4つ予測し、それぞれについて検証を行った。

「変化の要因として予測されるもの」

- ① マイナスの影響を与える生徒がいなくなった
- ② 最上級生としての自覚が出てきた
- ③ 一クラスの人数が減った
- ④ 持ち上がりの教師の存在があった

(2) 4つの調査と結果からの考察

① 抽出生徒に対する面接調査

この面接調査では、3年次になっての授業への取り組みや1年次からの自らの成長に伴う変化等について、先生方から名前が挙げられた生徒などを対象に聞き取り調査を行った。生徒の発言を基に分析してみると、「男子も変わって」や「茶化す生徒がいなくなったことが大きい」という言葉から、マイナスの影響を与える生徒がいなくなったことが影響していると言える。中には、マイナスの影響を与えていた生徒がクラスの合唱推進委員となって、クラスの合唱をリードするなど大きな変化が見られた者もあり、最上級生の自覚も影響していると考えられることもできた。また、「発表がしやすくなった」、「聞きやすくなった」といった言葉から、クラスの人数が減ったことで授業にもよい効果が出てきていることがわかる。

更に注目したい点は、「わかってくれるから楽」や「2年の時と同じ担任で自分を出しやすい」という言葉があり、これまでの先生方との関わりのよさが伺え、持ち上がりの教師がいたことは、「3年次の表れの変化」に影響したと考えられる。

② 生徒による座談会

抽出生徒による面接調査は、調査対象数が少ないことやこちらからの問いに答える形をとったため偏りのある結果が出ていた可能性があることから、代表生徒による座談会を行った。

1回目は、筆者が司会を行い「3年間の成長を振り返ろう」というテーマのもと、自由に話し合う形をとった。2回目は、同じく筆者が司会を行ったのだが、自由に話し合う形ではなく、項目を与えて考える時間をとり答える形をとった。なお、話し合われた内容は、文字として打ち出し、項目ごとに分類する作業を行い、それを基に予測した要因の検証を行った。

結果としては、予測した4つの要因の中で②の「最上級生としての自覚が出てきた」という項目以外は影響していたと考えられる。②については生徒の発言が少なく、影響があったかどうかははっきりしなかった。影響があったと考えられる3つの要因の中でも、特に④の「持ち上がりの教師の存在」については、生徒にとって安心できる状況をつくり出していたと言える。座談会に参加した生徒からは「1, 2年の経験があるから、ここまでOKというところがわかる。」や「先生たちのことを色々わかってきているから話を聞いても、言いたいことがわかる。」といった言葉から、持ち上がりの教師との関係ができていくことがわかる。中でも学年主任の先生（K1：男性）が「理想の教師像」として挙げられるなど、生徒からの信頼が厚く、「3年次の表れの変化」には大いに影響していたと思われる。また、3年次から担任になった先生方（K3：男性、K4：男性）に対して「いい先生だ」、「よかった」という言葉が聞かれ、影響を受けていることも明らかになった。

③ 学年付教師に対する面接調査

1年次から持ち上がっている3名の先生方（K1、K2：男性、K5：女性）を中心に、学年付きの先生方に対する面接調査を行った。調査の内容は、「3年次の表れ」についてと、生徒への思いやこれまでの関わりについてである。

「自己肯定感の低い生徒たちの影響が大きかった」という言葉が聞かれ、「マイナスの影響を与える生徒」の存在が大きかったことが伺える。「彼らの影響で表に出られない状況にあった」生徒たちが、3年次に活躍できる状況になったことで、学年全体が落ち着いて授業に取り組めるようになったと考えられる。

注目すべきは、「階が分かれたことで、落ち着きがなく賑やかな生徒たちが分散した」、「3クラスでは大人になれない生徒たちをプラスに引っ張れる状況につながった」という言葉である。これは、K1の先生の言葉であるが、影響力のある生徒を分散させることで、「大人になれない生徒をプラスに引っ張ることができる」と予測していたということわかる。「誰と誰を分ければ落ち着くのか」、「誰と誰と一緒にすれば力を発揮できるのか」を理解されていたからこそ、できたことである。これは、持ち上がりの教師だからこそできた、指導の積み重ねによる「生徒理解」が根底にある。「マイナスの影響を与える生徒」がいなくなるように、学年の先生方が学級編成をしたと考えることができる。これが行えた背景には、「指導を通して互いに理解することに繋がった」、「1年次からの関わりの積み上げは大きい」という先生方の関わりがあり、苦勞しながらも生徒との信頼関係を築いてきたことがわかる。このような関わりがあったからこそ、前項「生徒による座談会」で「理想の教師」としてK1の先生の名前が挙がるような信頼を得られたと言える。

また、この調査では「3年生としての自覚」が影響していると考えることができた。「リーダーがリーダーとして振る舞えるようになった」の言葉など、大きく影響していたという結果に繋がる発言が多く見られる。さらに、先生方は、この自覚には「縦割り活動」が大きく影響していると発言している。校長先生も、「3年生になるとよくなる。なぜなら3年生の姿を見ているから。自分たちもよくなりたいと思うだろう。よいモデルがあるから。縦割り活動がよい影響を与えている。」と言われており、「縦割り活動」は、「3年生としての自覚」を意識させる上で、大きなポイントであると考えられる。

④ ターゲットとした教師の行動観察

教師のどのような関わりが生徒の信頼感に繋がるかを検証するために、ターゲットを決め教師の行動観察を行った。対象教師は1年次からの持ち上がりであるK1、K2の2人の教師、また3年次より担任となったK3、K4の2人の教師についても観察を行った。

4人の先生方を観察して共通していた点が見られた。まず、「教師が自分を語る」という点である。下記にK1先生の事例を示す

事例1 K1先生の授業 理科「エネルギー」の単元における一場面(平成22年 6月25日)

全体を見渡して、姿勢が取れているかを確認してから挨拶をさせる。

初めに、昨日の家でのできごとを話す。

「子どもが、フォークラフトのおもちゃで遊んでいて…。」

と話だし、身振り手振りで様子を伝える。子どもから借りて自分もやったことを笑顔で話す。「空気で浮いている」、「まっすぐ動こうとする」ということを伝えながら、

「これって、勉強したよな。」

と言って、理科の授業に結びつけていく。

(実習記録ノートより)

このK1先生をはじめとして、観察させていただいた先生方は、授業の冒頭で毎回、自らの経験や思いを語る場面が見られた。このように「教師が自分を語る」ことは、生徒にとっても「自分を語っていい」という安心感に繋がると考えられる。K1先生は、インタビューでも「授業の中で生徒とのリレーションを築くようにしてきた。」と言われており、生活指導では厳しく生徒と接するが、その分授業で生徒との信頼関係を築こうと「自分を語る」ことを実践されている。

もう一つは、4人の先生方は「悪いことは、悪い。」という態度をしっかりと示すことができている点である。ただ、生徒の気持ちに寄り添うだけでなく、指導すべきは指導するという姿が生徒からの信頼に繋がっていると考えられる。一人一人の生徒と気持ちで繋がる関わり方をしていくことと、全体のあるべき姿をきっちりと伝えていくことが、生徒の安心感に繋がると言うことができるだろう。

さらに、この検証ではK4の先生の「関わり方」に注目をした。K4先生は3年次からの担任であるが生徒との関係が非常によく、生徒による座談会の中でも「気軽に話しかけられる」という言葉が聞かれた。生徒が近寄ってくる「先生の魅力」を探ることで、「生徒との関係づくり」に必要な関わりが見えるだろうと思い行動を観察した。下記にK4先生の事例を示す。

事例2 教師から近寄り声をかける (平成22年11月12日)

【朝】女子バレー部の部活指導を行う

生徒がサーブ練習をしている中、先生もサーブを打つ。ただサーブをするだけでなく、生徒に声をかけて、サーブをさせて、「今のよかったよ。」と即座に声をかける。

レシーブ・アタックの流れの中に入り、一緒に練習する。生徒が11人しかいないので、足りないところを見つけてその練習に加わっていく。

声を荒げることなく、穏やかな口調で生徒に語りかけている。常に笑顔である。

教室へ戻る。提出物のチェックをしながらも、語りかけてくる生徒には返事をして会話をする。「いい呼びかけだね。」と生徒の呼びかけに即座に反応して認めたり、逆に、ロッカーにカバンがしまわれていないと強い口調で「誰、しまっていないの。」と注意をしたりする。

【休み時間】

職員室前で2年生の生徒に声をかける。「□□君、元気。」と言いながら、頭をなでる。2年生の女子バレー部の生徒が来て会話をする。ここでも笑顔である。3年生の男子が通り過ぎる時に「○○大丈夫。」と声をかける。
(実習記録ノートより)

観察して気づいたことは、生徒に話しかける時、一緒に活動している時は常に笑顔であること。そして、先生から話しかけているということである。

特に「先生から話しかけている」については、部活指導でのアドバイスやプレー後の評価など、自然な関わりの中にも個に対して話しかける姿が多く見られた。また、教室や職員室でも、担任するクラスの生徒だけでなく、近くにいる生徒に対し先生から声をかけていく姿が多く見られた。その時に、笑顔で声をかけられるので生徒も反応を返しやすと思われる。

このような表れとは反対に、厳しい指導もされていることがわかる。筋の通らない行動に対しては、生徒が納得するまで指導をする。

生徒が「気軽に話しかけられる」と感じているのは、「先生から話しかける」という行為が、相手に安心感を与えているからだと考えられる。常に生徒の動きや言葉に気を配っており、「気づいたことに対して声をかける」という行為が、生徒にとっては存在感や居場所感に繋がっていると思われる。

4. 調査から得られた知見

(1) 中学校における「持ち上がり教師」の重要性

本調査では、変化に影響を与えた要因を4つ予測し検証してきたが、その中でも1年次からの持ち上がりの先生方の存在は大変大きなものであったと判明した。入学時の出会いから、適切な指導を繰り返すことを通じて生徒との関係をつくり、その生育や家庭状況までも把握した上で、真の「生徒理解」をされていた。その生徒理解があったからこそその学級編成があり、結果として「安心して自分を表現できる雰囲気」が3年次にはつくられたと理解する。

(2) 生徒理解に繋がる生徒との関わりとは

本調査では、4人の先生を対象に行動観察を行った。4人の先生方に共通していた点は、教師

からの一方的な押しつけの指導ではなく、生徒の心に寄り添う指導を心がけているということである。その表れとして一つ挙げるとするならば、授業の始めに必ず「自分のことを語る」ということである。教師自身が自分のことを語ることで、生徒との心の距離は近くなる。この繰り返しで、生徒の安心感に繋がり、生徒も自分を語りやすくなる。これが「生徒理解」に繋がると言えるだろう。

また、K4の先生に顕著に見られた行動であるが、生徒に対し「先生から」話しかけることが、生徒にとって「話しやすい」状況をつくっているということである。今回、観察を行って、教師のこの行為こそが生徒の「安心感」に繋がっていると感じることができた。小学校までは、子どもの側から先生に近づいてくるが、思春期を迎え、そのような表れは見られなくなる。しかし、葛藤を繰り返す心の中は不安でいっぱいであり、方向性を示してくれる大人を必要としている時期だと考えられる。中学校の教師は、「生徒を待つのではなく、自ら生徒に関わっていかなければならない」と感じることができた。この「先生から」が「生徒理解」や、生徒の「安心感獲得」のキーワードだと思うに至った。

(3) 教育課程の重要性

本調査で明らかになったことがもう一つある。「縦割り活動」が「3年生としての自覚」を持つことに繋がっていたということから、教育課程における行事等の重要性である。新指導要領の実施に伴い授業時間が増える一方で行事の精選が進められているが、今一度行事等の目的を職員全体で確認する必要があるだろう。

5. 課題と今後の展開

今回の調査では、「3年次の変化した表れ」のよい側面について検証してきた。その一つの要因に、「マイナスの影響を与える生徒がいなくなった」ことを挙げたが、この中には教室には入れなくなってしまった生徒がいることも事実である。これらの生徒も含めて、全ての生徒が安心して生活できる環境を学校は整えていかなければならない。

このような生徒は、「自己肯定感の低い生徒たち」であることが多く、家庭環境や生育歴がその行動の表れに大きく影響していると考えられる。この「自己肯定感の低い生徒たち」への対応が、これからの学校にとって一つの大きな課題である。これらの生徒の表れは、中学入学時から見られることも多く、A中学校の1年生でも、「マイナス」発言を繰り返したり、周りの生徒もそれを助長したりする姿が見られる。1年次から、このような生徒との関わりを重視し、積極的に信頼関係を築いていく必要がある。そのためには、その生徒の家庭環境や生育歴をしっかりと理解し、その生徒の困り感にしっかりと寄り添っていく姿勢が必要だろう。そのためには、小学校との更なる連携が必要だと考えられる。

今回の調査は、検証により明確となった「教師の具体的な関わり」を自分自身の成長に生かすだけでなく、同僚への支援や後輩への指導に生かすことを目的としている。今後、学校現場に戻り、明確となった「教師の具体的な関わり」を実践して、同僚や後輩のモデルとなって示していくことが筆者の使命である。また、ただ実践として示すだけでなく、多くの先生方に伝えていくことで、学年や学校全体が安心して生活できる場になるよう努力していきたい。